大乘莊嚴經論菩提品の基く諸經に就て

西尾京雄

一、はしがき

大乘莊嚴經論は菩薩種性(大心を發すもの)の爲に諸の大乘經典の要旨、或は要文を作頌し五義によつて莊嚴し類集した論である。而して、本論の組織の基く所は瑜伽論菩薩地であることは、梵本、第十章、の初 Uddāmaṁ の解釋ある所に指示せられ、先輩諸學者の既に認容せらるゝ所である。然るに、其等兩者の相應する諸品は漢譯についていはば、種性品以下の諸品であるが、其の以前の緣起品、成宗品、歸依品の加はるゝは何に基くものであるであらうか。成宗品、歸依品については未だその基く所を知り得ないが、緣起品は、復、瑜伽論、第六十四卷、第十二、造論の儀式(遁倫、瑜伽論記、卷第十八、大正四二、七一〇)をあぐる條下によりて作頌せられたものであることを知る。

そこでは、造論儀式は四に分ち、一には先歸禮二師、ついで造論緣起として、二には六因を具して方に造論す可きこと、三には四德を具して方に造論すべきことを明し、最後に、四に造論は莊嚴經と名く可きことを明してゐる。

莊嚴經論に於ける、第一偈の前半偈、「義智作諸義、言句皆無垢」とは六因の要約であり、後半偈「救濟苦衆生、慈

悲爲性故」とは四德の要約と解せらるべく、第二偈は所被の機をあげたるものであり、第三偈、第四偈の五喩は正しく、瑜伽論の造論は莊嚴經と名くといふ五喩の文を作頌したものにすぎない。今、瑜伽の論文と對比すれば、

復次此中如實開示如來所說經義名莊嚴經

譬如紅蓮其花未開雖生歡喜不如敷榮　　譬如金成器

又、如眞金未爲嚴具雖生歡喜不如成功　　譬如花正敷

又、如善膳未及得食雖生歡喜不如已食　　譬如食善膳

又、如慶書未暇開覽雖生歡喜不如披閱　　譬如解文字

又、如珍寶未得現前雖生歡喜不如已得現前受用　　譬如開寶篋是各得歡喜

如是如來所說經義、若未顯發雖生歡喜不如開示、故說造論名莊嚴經　　五義法莊嚴歡喜亦如是

の如くである。たゞ、莊嚴經論作者はこの五喩に五義を見出しつゝ、菩薩地に基いて造論したものであることを知る。かく、上述の對照文によりて知らるゝが如く、莊嚴經論の頌はその組織が基く所あるばかりでなく、頌の一々も亦その據る所あるものである。從つて、本論頌、二十一品(漢譯、二十四品)の中には、

(一)直接、諸經の頌を借りて來たもの

(二)經文を偈に改めたもの

(三)論文を偈に改めたもの

(四)經文を取意して頌とせるもの

(五)傳統の教學思想に據るもの

等、觀取し得らるゝものである。それ故に、各品の論頌の基く諸經を研究することによつて、この瑜伽、唯識教學の初祖達は如何なる經典をもつてその教學の根基となしたか知られ得ると共に、他方、大乘佛教經典史の上から、龍樹菩薩時代までのものを第一期として、彌勒、無着菩薩までを第二期とし、世親以後を第三期として定めるとして、かなり多數の大乘經典の成立についても學的に判別せらるゝことゝもなるであらう。今は、本論頌の全體に及ぼし得るまでには研究は進んで居らず、菩提品の基く諸經について一考しやうといふのである。

二、菩提品の地位

先づ、大乘の菩薩は何を學ぶべき(所學法)であるか。學ぶべき對象を五義によつて知らねばならない。

第一、所成(Sadhyam, Bsgrub-par-bya-ba)義、所學法である大乘教の成就(成宗品)、發菩提心の對象たる最上の歸依の成就(歸依品)、その現取因(Ñe-bar-len-paḥi rgyu)たる大乘の種性成就(種性品)を示して、三種の所成を攝するのである。

第二、所知(Vyutpādyaṁ, Bye-brag-tu çes-par-bya-ba)義、差別して知らるべきものは二種であつて、發心品と自、他の利圓滿(二利品)とである。

第三、思惟(Cintyam, Bsam-par-bya-ba)義は二種であつて、甚深の眞實と廣大の方便善巧の眞實(眞實品)とである。

第四、不思惟(Acintyam, Bsam-gyis-mi-phyab-pa)義は二種で、神通等の威力不可思議(神通品)と、欲と信等ある自と、他成熟不可思議(成熟品)とである。

第五、圓成(Pariniṣpannam, Yoṅs-su-grub-pa)義とは一あり、現等覺なる最後品(菩提品)である。

以上によつて、大乘菩薩の所學法が示されたのであるから、次にその所學法を如何にして學ぶべきであらうか。これも亦、前の如く五義によつて示さるゝ。

初めに、大乘の所學處たる無上乘が成立せられたるが故に、信解が生ずる(明信品)、信解より求法が起る(述求品)其を說く善友に據つて法を說く(弘法品)、其より成就に入るなり(隨修品)。是等が第一所成義である。

第二所知義は、敎授と敎誡(敎授品)とである。

第三思惟義は甚深の眞實と廣大なる方便善巧との品(業伴品)、方便は又、三種にして、四攝事と相應の六波羅蜜(度攝品)、四無量によつて攝せらる。〔三〕寶を供養する等の說(供養品、親近品、梵住品)、道によつて攝せらるゝ菩提分と相應する法說(覺分品)である。

第四、不思惟義は功德品であり、第五、圓成義は證得の義を自ら覺證すべきは最後の品(行住品、敬佛品)である。

以上の五義を以つて各品に配當する理解の仕方は智吉祥(jñāna-śrī)の「經莊嚴攝義」[一]によつたものであるが、此によつても、菩提品は菩薩の所學法の究竟處を述べたものであることを知り得るであらう。

實に、「大乘莊嚴經論」の李百藥の序には、「其菩提一品最爲微妙、轉八識以成四智、束四智以具三身、詳諸經論所未曾有、可謂聞所未聞、見所未見」と述べて居るが如く、一論の骨目であり、八識、四智、三身等佛敎々理學史上、

重要なる思想が説かれてゐるのであるから、本論頌の基く諸經を究明して置くことは、是非なさねばならないことであらう。

三、菩提品の內容

扨て、菩提品の頌の一々の基く諸經を探究する前に、智吉祥の「總義」[三]を參酌して、藏、梵本、八六偈(漢譯八〇偈)について略科をして內容の一般を窺うことゝしよう。

菩提品、大科(二)
- 初、略說(二)
- 一、一切種智(四)
  - 一、至得(困)(第一偈)(漢、第一偈、一切難已行)
  - 二、自性(果)(第二偈前半偈)(漢、第二偈前半偈、成就一切種)
  - 三、譬喩(第二偈後半偈)(漢、第二偈後半偈、譬如大篋開)
  - 四、重釋(第三偈)(漢、缺)
- 二、無二相(三)(有威力)
  - 一、自性(第四偈)(漢、第三偈前半偈、白法爲佛身)
  - 二、譬喩(第五偈)(漢、第三偈後半偈、佛爲法寶因)
  - 三、重釋(第六偈)(漢、第四偈、具法亦離法)
- 二、廣說(一二)

- 一、無上歸依（五）
  - 一、略顯救護（第七偈）（漢、第五偈、諸佛常救護）
  - 二、廣顯救護（第八偈）（漢、第六偈、諸災及惡趣）
  - 三、歸依最勝（第九偈）（漢、第七偈、諸佛勝歸處）
  - 四、歸依勝因（第一〇偈）（漢、第八偈、諸佛善滿身）
  - 五、歸依三大（第一一偈）（漢、第九偈、盡於未來際）
- 二、轉依相（四）
  - 一、轉依離得（第一二偈）（漢、第一〇偈、二障種恒隨）
  - 二、轉依殊勝（第一三偈）（漢、第一一偈、彼處如來住）
  - 三、功德差別（第一四偈）（漢、第一二偈、他利及無上第一三偈、殊勝與遍授）
  - 四、譬喻（三）
    - 一、空（第一五偈）（漢、第一四偈、如空遍一切）
    - 二、水器（第一六偈）（漢、第一五偈、譬如水器壞）
    - 三、火聚（第一七偈）（漢、第一六偈、譬如火聚性）
- 三、如來事業（二）
  - 一、無功用（二）
    - 一、天鼓（第一八偈）
    - 二、意珠（第一九偈）（漢、第一七偈、意珠及天鼓）
  - 二、無間（二）
    - 一、無斷絕（第二〇偈）（漢、第一八偈、依空業無間）
    - 二、有生滅（第二一偈）
- 一、相甚深（四）
  - 一、清淨相（第二二偈）（漢、第一九偈、如前後亦爾）
  - 二、大我相（第二三偈）（漢、第二〇偈、清淨空無我）
  - 三、無記相（第二四偈）（漢、第二一偈、非體非々體）
  - 四、解脫相（第二五偈）（漢、第二二偈、譬如鐵熱息）

四、無漏法界（五）
- 二、處甚深（一）……（第二六偈）（漢、第二三偈、諸佛無漏界）
  - 一、寶依止業（前半）（第二七偈）（漢、第二四偈、譬如大寶藏）
  - 二、成熟衆生業（後半）（第二七偈）（漢、第二五偈、譬如密雲布）
  - 三、到究竟業（前半）（第二八偈）（漢、第二六偈、譬如日月盈）
  - 四、說正法業（後半）（第二八偈）（漢、第二七偈、譬如日輪出）
  - 五、化所作業（第二九偈）（第三〇偈）（漢、第二八偈、譬如日光合）
  - 六、智慧轉業（第三一偈）（漢、第二九偈、譬如日光照）
  - 七、無分別業（第三二偈）
  - 八、種々智業（第三三偈）
  - 九、智不轉業（第三四偈）（漢、第三〇偈、譬如諸日光）
  - 一〇、智差別業（第三五偈）（漢、第三一偈、譬如滋灰力）
- 三、業甚深（二）
- 四、重顯前甚深義……（第三六偈）（漢、第三二偈、無漏界甚深）
- 五、顯法界如來藏……（第三七偈）（漢、第三三偈、一切無別故）
- 五、諸佛自在（變化）（三）
  - 一、顯佛增上威力……（第三八偈）（第三九偈）（漢、第三四偈、聲聞及緣覺）
  - 二、顯品類及甚深義……（第四〇偈）（漢、第三五偈、如是佛變化）
  - 三、轉（二）
    - 一、顯五根轉（第四一偈）（漢、第三六偈、如是五根轉）
    - 二、顯意根轉（第四二偈）（漢、第三七偈、如是意根轉）

- 初、別說差別（七）
  - 三、顯義受轉（第四三偈）（漢、第三八偈、如是義受轉）
  - 四、顯分別轉（第四四偈）（漢、第三九偈、如是分別轉）
  - 五、顯安立轉（第四五偈）（漢、第四〇偈、如是安立轉）
  - 六、顯欲染轉（第四六偈）（漢、第四一偈、如是欲染轉）
  - 七、顯空想轉（第四七偈）（漢、第四二偈、如是空想轉）
- 二、總結前義……（第四八偈）（漢、第四三偈、如是無量轉）
- 六、諸佛成熟衆生（七）
  - 一、顯次第成熟因……（第四九偈）（漢、第四四偈、令集亦令長）
  - 二、顯希有非希有……（第五〇偈）（漢、第四五偈、難得已具得）
  - 三、顯普遍成熟因……（第五一偈）（漢、第四六偈、轉法及法沒）
  - 四、顯自然成熟因……（第五二偈）（漢、第四七偈、不起分別意）
  - 五、顯自然成熟譬……（第五三偈）（漢、第四八偈、如日自然光）
  - 六、顯展轉成熟因……（第五四偈）（漢、第四九偈、一燃然衆燈）
  - 七、顯無厭成熟因……（第五五偈）（漢、第五〇偈、巨海納衆流）
- 七、諸佛淸淨法界（八）
  - 一、顯法界自性義……（第五六偈）（漢、第五一偈、二障已永除）
  - 二、顯法界因義……（前半偈第五七偈）（漢、前半偈第五二偈、一切種如智）
  - 三、顯法界果義……（後半偈第五八偈）（漢、後半偈第五二偈、利樂化衆生）
  - 四、顯法界作業義……（前半偈第五八偈）（漢、前半偈第五三偈、發起身口心）
  - 五、顯法界相應義……（後半偈第五八偈）（漢、後半偈第五三偈、二門及二聚）
  - 六、顯法界轉（位）義……（第五九偈）（漢、第五四偈、自性及法食）

- 八、諸佛三身（四）
  - 一、總顯三身關係……（第六〇偈（漢、第五五偈、性身及食身）
    - 一、顯受用身…（第六一偈（漢、第五六偈、食身於諸界）
    - 二、顯自性身…（第六二偈（漢、第五七偈、平等微細身）
    - 三、顯變化身…（第六三偈（漢、第五八偈、化佛無量化）第六四偈（漢、第五九偈、工巧及出生）
  - 二、別顯三身差別（三）
  - 三、顯三身攝諸佛身……（第六五偈（漢、第六〇偈、應知佛三身）
  - 四、顯諸佛平等常住……（第六六偈（漢、第六一偈、由依心業故）
  - 一、總顯四智關係……（第六七偈（漢、第六二偈、四智鏡不動）
  - 二、別顯四智差別（四）
    - 一、顯大圓鏡智（二）
      - 一、顯轉得第八識…（第六八偈（漢、第六三偈、鏡智緣無分）
      - 二、顯大圓鏡智用……（第六九偈（漢、第六四偈、鏡智諸智因）
    - 二、顯平等性智（二）
      - 一、顯轉得第七識…（第七〇偈（漢、第六五偈、衆生平等性）
      - 二、顯平等性智用……（第七一偈（漢、第六六偈、大慈與大悲）
    - 三、顯妙觀察智（二）
      - 一、顯轉得第六識…（第七二偈（漢、第六七偈、觀智識所識）
      - 二、顯妙觀察智用……（第七三偈（漢、第六八偈、恒在大衆中）
    - 四、顯成所作智（二）
- 九、諸佛智慧（三）

- 一〇、顯諸佛不一不多……（第七七偈）（漢、第七一偈、性別及不虛）
  - 一、顯轉得前五識……（第七四偈）（漢、第六九偈、事智於諸界）
  - 二、顯成所作智用……（第七五偈）（漢、缺）
  - 三、顯四智因……（第七六偈）（漢、第七〇偈、攝持及等心）
- 一一、顯入佛性方便（四）
  - 一、顯覺偏計無自性……（第七八偈）（漢、第七二偈、分別若恒有）
  - 二、顯覺不可得修……（第七九偈）（漢、第七三偈、欲修最上修）
  - 三、顯有慢菩薩相……（第八〇偈）（漢、第七四偈、尊重及長時）
  - 四、顯無分別菩薩相……（第八一偈）（漢、第七五偈、觀法唯分別）
- 一二、諸佛同事業（用）（二）
  - 譬喻（二）
    - 一、諸河譬……（第八二偈）（漢、第七六偈、應知諸河水）
    - 二、大海譬……（第八三偈）（漢、第七七偈、一切入大海）
  - 合法（二）
    - 一、未入菩薩相……（第八四偈）（漢、第七八偈、如是諸別解）
    - 二、已入菩薩相……（第八五偈）（漢、第七九偈、一切入佛體）
- 一三、顯於佛性勸進……（第八六偈）（漢、第八〇偈、無比圓白法）

以上によつて菩提品の科を終るのであるが、略說の二品、廣說の十三品の六科について安慧釋には全體に渡つてゞはないが、その關係について各品の初に當つて說いて居るが、其等の有機的關係を强いて考察する必要もないであらう。何故なれば、其等の各品は諸經典より隨時に借りて來て、此の菩提品の必要のものが集めらたものと見られるか

らである。余は、此より、安慧釋の指示を得て、各品、各偈について、その顯著なものから、其等の基く所を明にしよう。

四、菩提品の基く諸經典

〔A〕 佛地經(Saṅs-rgyas-kyi saḥi mdo)

佛地經は大正藏經、十六卷(七二〇、中―七二三、中)の中に攝せられ、玄奘譯にして一卷の小經である。親光論師の佛地經論に於て本經を敎起因緣方、(序分)、聖敎所說分(正宗分)、依敎奉行分(流通分)の三分して釋して居られるがその聖敎所說分には五種法、大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智、淸淨法界なる　一、五法差別相　二、受用和合一味事智　三、總頌にして諸功德を具する淨法界相が說かれてゐるのである。而して、この佛地經、正宗分の總頌四頌がそのまゝ、何等の變改をすることなく、本、菩提品の廣說、第七、諸佛淸淨法界品の頌となつてゐるのである。今、その兩者を對比しよう。

第五一頌	二障已永除	第一頌	一切法眞如
	法如得淸淨		二障淸淨相
	諸物及緣智		法智彼所緣
	自在亦無盡		自在無盡相
第五二頌	一切種如智	第二頌	普遍眞如智

修淨法界因　修習證圓滿
利樂化衆生　安立衆生二
此果亦無盡　諸種無盡果

第五三頌　發起身口心　第三頌　身語及心化
三業恒時化　善化方便業
二門及二聚　定及總持門
方便悉圓滿　無邊二成就

第五四頌　自性及法食　第四頌　自性法受用
變化位差別　變化差別轉
此由法界淨　如是淨法界
諸佛之所說　諸佛之所說

此によつて、其等の間の相違と見ゆるは譯者の譯語の相違であり、又、莊嚴經論の譯者、頗羅頗蜜多羅のその譯風に見らるゝ註釋を參照してゐるであらう意樂の相違によるものであつて、此を莊嚴經論の藏譯(三)と、佛地經(四)の藏譯とを比較すれば殆んど同譯であることが知られるが、其等は又の機會に讓るであらう。

次に、佛地經の經文を偈に改めたるに過ぎないものは、菩提品、廣說中、第十二、諸佛同事業品のそれであつて、佛地經、聖教所說分(正宗分)第二、受用和合一味事智を明す二喩のうち、大海喩の經說である。今、其等を比較して

う。

莊嚴經論	佛地經
第七六頌　應知諸河水	譬如種々大小衆流
別依亦別事	未入大海各別所依
水少蟲用少	異水少水水有增減
未入大海故	隨其水業所作各異
	少分依持水族生命
第七七頌　一切入大海	若入大海無別所依
一依亦一事	水無差別水無限量
水大蟲用大	水無增減所作業一
亦復常無盡	廣大依持水族生命
第七八頌　如是諸別解	如是菩薩若未證入
別意亦別業	如來清淨法界大海
解少利益少	各別所依異智少智
未入佛體故	智有增減隨其智業
	所作各異少分衆生

第七九頌　一切入佛體　成熟善根之所依止
一解亦一意　若已證入如來淸淨法界大海
解大利益大　無別所依智無差別
極聚亦無盡　智無限量智無增減
受用和合一味事智
無量衆生成熟善根之所依止

次に、經文の要旨を約めて頌としたものは、菩提品、廣說中、第九、諸佛智慧品の諸偈であつて、四智の各々は佛地經、正宗分、五法差別の諸文に據つたものである。今、安慧釋の指示する所によつて說明しやう。

大圓鏡智について第六七、六八、六九の三偈ある中第六七偈は漢譯、と相違するものであるから、梵本と同一である藏譯を和譯して比較することゝしやう。

第六七　鏡智は不動にして、三智はそれを所依とするものなり、
平等と觀察と、成所作のみなり。

此の一偈は鏡智と三智との關係を顯はしたものであり、此偈の第一句は正しく、(五)大圓鏡智九種勝相ある中、第二無分別相の經文を所依としたものである。卽ち、

如大圓鏡有樂福人、懸高勝處無所動搖、諸有去來無量衆生、於此觀察自身德失、爲欲存德捨諸失故、如是如來懸圓鏡智、處淨法界無間斷故無所動搖、欲令無量無數衆生、觀於染淨、爲欲取淨捨諸染故、

とある、鏡智の淨法界に處し、動搖する所なきを要約して、第一句を作偈したものであることは疑ふべくもない。後三句は第八能生一切智根本相にもよつたものであらうか。

第六三偈

鏡智緣無分
相續恒不斷
不愚諸所識
諸相不現前

第六八偈(藏譯)

鏡智は無我所
斷ぜず、恒に隨行、
一切の所知に愚ならざるに於て
恒に其(所知)に於て(諸相は)
現前せざるなり。

右偈に於て第一句は大圓鏡智の第五、無有我所、無攝受相、卽ち

如圓鏡上非一衆多諸影像起、而圓鏡上無諸影像而此圓鏡無動無作、如是如來圓鏡智上、非一衆多諸智影起、圓鏡智上無諸智影、而此智鏡無動無作

の經文により、第二句は大圓鏡智の第七、遍處恒時生智影相、卽ち、

又如圓鏡周瑩、其面於一切處、爲諸影像遍起依緣、如是如來大圓鏡智、不斷無量衆行善瑩、爲諸智影遍起依緣……

……

の經文により、第三句は大圓鏡智の第三、障淸淨相、卽ち、

又如圓鏡極善磨瑩、鑒淨無垢光明遍照、如是如來大圓鏡智、於佛智上、一切煩惱所知障垢永出離故、極善磨瑩爲

依止定、所攝持故鑒淨無垢、作諸衆生利樂事故、光明遍照、

の經文により、第四句は大圓鏡智の第六、不忘一切所知境相、卽ち

又加圓鏡與衆影像、非合非離、不聚集故、現彼緣故、如是如來大圓鏡智、與衆智影、非合非離、不聚集故不散失故

の經文に基いたものである。

第六四偈　　第六九偈(藏譯)

鏡智諸智因　　一切智の因の故に

說是大智藏　　大智藏の如し、

餘身及餘智　　受用の佛性(と)

像現從此起　　智影像(とが)生ずるが故なり。

右の大圓鏡智の用を示す偈は、大圓鏡智の第四、依止因緣生智影相に基いたものであり、卽ち、

又、如圓鏡依緣本質、種々影像相貌生起、如是如來大圓鏡智、於一切時依諸緣故、種々智影相貌生起

の經文である。尙、安慧は、この佛地經の文と共に如來興顯經の文をもあげてゐる。是は以下に述べるものであるが彼此對照すれば善くその基く所を知るであらう。

次に、平等性智の二頌に進まう。卽ち、

第六五偈　　第七〇偈

衆生平等智　　淨修により衆生に於て
修淨證菩提　　平等性の智と考へられたり。
不住於涅槃　　不住涅槃に入れるものは
以無究竟故　　平等智ありと考へられたり。

右偈の基く經文として、安慧は前二句には默してゐるが、後二句の據として、佛地經に平等性智について十相を說く中、第八相をあげてゐる。卽ち、

世間寂靜皆同一味、平等法性圓滿成故

といふのである。

前二句は、恐らく、十相の中、第一相の經文、

證得諸相・增上・喜愛、平等法性圓滿成故

といふものが、その基くものであらう。[六] 親光の釋する所によれば、諸相とは如來大士の相、增上とは富貴自在、喜愛とはその徧計力、其等について我他彼此の相をとゞめず、徧計力を離るゝことが證得であつて、初地にそれを證り、地々修習して最後佛地に圓滿することゝいふ。この解釋は、又、安慧の本偈の釋[七]と同ずるものであることから知り得る。

第六六偈　　第七一偈

大慈與大悲　　一切時に、慈と

是二恒無絶　大悲等と隨應す、
衆生若有信　衆生等の信解の如く
佛像卽現前　佛像は現示するなり

右偈は安慧の指示するが如く、前二句は平等性智十相中の第四、弘濟大慈、平等法性圓滿成故と、第五、無待大悲、平等法性圓滿成故とにより、後二句は第六、隨諸衆生所樂示現、平等法性圓滿成故とによるものであることは明かである。

次に、妙觀察智の二偈は、佛地經妙觀察智を十種の因によりて說述せられてゐるが、一々經文を揭げることは煩らはしければ、各頌の下に相應の因を記すに止めやう。

第六七偈

觀智識所識……第十因、斷一切疑因
恒時無有礙……第二因、生起因
此智如大藏
總持三昧依　……第一因、建立因

第六八偈

恒在大衆中
種々皆示現　……第五因、受用因

能斷諸疑網
雨大法雨故　……第八因、雨大法雨因

次に、成所作智の二偈、（漢譯は後一偈を缺く）について第六九偈は恐らく、佛地經の成所作智の經文を一偈に要約したものであらう。卽ち、

第六九偈

事智於諸界、種々化事起
無量不思議、爲利群生故

といふは、佛地經に於て、如來の化身を成立するについて、一身化（現神通化、現受生化、現業果化）、二、語化（慶慰語化、方便語化、辯揚語化）、三、意化（決擇意化、造作意化、發起意化、受領意化）の十一相について說かれてゐるが、この化三業の化身について一頌に總括したものと見ることが出來るからである。

梵、藏本の成所作智の用を顯はす頌、第七五頌は漢譯に缺けてゐるものであつて、前述の大圓鏡智、平等性智、妙觀察智等に於て二頌づゝなのであるから、今も亦、二頌ある方が正しいのではないかと思はるゝのであるが、今、西藏文より和譯すれば、

第七五頌

かの佛變化は常に、所作成就の差別と
數と刹土とによつて、一切種に、不可思議なりと知るべきなり。

とあつて、安慧はその所依として、如來與顯經の文をあげてゐるが、各句一致してゐるわけではない。

かくして、諸佛智慧品に於て、四智の因を顯はす總結の偈のみ殘ることゝなるが、それも、佛地經四智の所說等によつて導かれるものであらう。かくの如く、全偈は佛地經の取意といつても過言ではないであらう。然し、佛地經のみによつて、この諸佛智慧品の諸偈はあるわけではなく、餘他の經意も亦參酌せられてゐるものなのである。

〔B〕如來與顯經

佛地經の如く、善く應用せられてはゐないが、安慧は四度、注意し、又、其の他の頌の基となつてゐるものである。

安慧はその經釋中に、De-bshin-gṣegs-pa skye ba phyuṅ-ba bstan-pahi mdo の經名をあげて經を引用してゐる。それを和譯すれば、如來出現法門經となり、此と似たる經名を大藏經中に現出すれば、竺法護譯、佛說如來與顯經、四卷(大、一〇、五九二)を見出し、佛馱跋陀譯六十華嚴經中、寶王如來性起品、第三十二(大、九、六一七、中)、實叉難陀譯、八十華嚴經中如來出現品、第三十七(大、一〇、二六二)が此と相應し、甘珠爾勘同目錄、No. 761 華嚴經、の如來出現品の西藏經名と正しく一致するものであり、安慧引用經文と類似の文を見出すことである。

(a)梵、藏本、第六九偈(漢、第六四偈)の前二句の所依として、

諸佛(九)、世尊は智慧の藏(にして)一切種(の)所依となる慧と相應するが故なりと、

との經文を引いてゐるが、是と類似の文は、八十華嚴では如來身第九相を說く所(大、一〇、二六七、中)同樣に、六十華嚴(大、九、六一七、中)、如來與顯經(大、一〇、六〇〇、中)の相當の文である。是によつて、第六九偈(漢第六四偈)は一

層、その所依を明にするであらう。

(b)梵、藏本、第七一偈(漢、第六六偈)前二句の所依として、

諸佛㊤、世尊は智慧の大月なり、一切衆生に清涼を示すが故なりと。

此と相應する經文は八十華嚴、如來身第六相を說くもの(大、一〇、二六六、下―二六七、上)、六十華嚴(大、九、六一七、上)如來與顯經(大、一〇、五九九、中)である。

(c)梵、藏本、第七二偈(漢、第六七偈)、第二句の所依として、

諸佛㊤、世尊は智慧の大日なり、一切の所知に於て智慧の(照)明となるが故なりと。

此と相應する經文は八十華嚴、如來身、第二相の文(大、一〇、二六六、上)、六十華嚴(大、九、六一六、上)、如來與顯經(大、一〇、五九八、中)に於て見らるゝ。

(d)梵、藏本、第七五偈(漢、缺)の所依として、

諸佛㊤、世尊は智慧の大藥を具す、一切衆生の煩惱の病を消除するが故なりと。

これと相應する經文は、八十華嚴、如來身、第七相の文(大、一〇、二七二、上)、六十華嚴(大、九、六二三、上)、如來與顯經(大、一〇、六〇〇、上)に於てゞある。

尙、安慧は指示してはゐないが、菩提品、廣說中、第二轉依相品の譬喩の三偈は本經より借りられたものである。

(e)漢、第一四偈(梵、藏本、第一五偈)と八十華嚴(大、一〇、二六六、上)の經文と比較しやう。

如空遍一切　譬如虛空遍至一切、色非色處、非至

佛亦一切遍　非不至、何以故、虛空無身故、
虛空遍諸色　如來身亦如是、遍一切處、遍一切衆生、
諸佛遍衆生　遍一切法、遍一切國土、非至非不至、何以故、如來身無身故、
爲衆生故、示現其身

この對比によつてその基く所を知り得ることであるが、その長行に對する頌（大、一〇、二六七、下）、六十華嚴（大、九、六一六、上）の長行及び頌、如來興顯經（大、一〇、五九八、中）をも參照すべきである。

（f）漢、第一五偈（梵、藏本、第一六偈）

譬如水器壞　如月舒光照法界
月像不現前　器壞水漏影隨滅
如是衆生過　最勝智日安如是
佛像亦不現　衆生無信見涅槃

この下に對比せしめたものは八十華嚴（大、一〇、二七七、上）の頌であるが長行（二七六、中）を見ることによつて更に明となるであらう。六十華嚴の頌（大、九、六二九、上）、如來興顯經（大、一〇、六一一、下）參照すべきである。

（g）漢、第一六偈（梵、藏本、第一七偈）と八十華嚴の頌（大、一〇、二七七、上）と對照すれば、

譬如火聚性　如火世間作火事
或然或滅盡　於一城邑或時息

如是諸佛化　　入中最勝遍法界
或出或涅槃　　化事訖處示終盡

とあり、長行(大、一〇、二七六、中)と合せ見るべく、六十華嚴(大、九、六二九、上)、如來興顯經をも對照すべきである。

(h)菩提品、廣說の中、第三、如來事業品の無功用を示す、第一偈、卽ち、藏、梵本に於ては第一八偈、

(天)鼓を打たざるに、聲が出づるが如く、
その如く勝者は作なく、說法等が出づるなり。

といふは、八十華嚴、(大、一〇、二六八、下)

佛子、彼天鼓音、無主無作、無起無滅、而能利益無量衆生、當知如來亦復如是、爲欲覺悟放逸衆生、出於無量妙法音聲……是爲如來音聲第三聲。

に基くもの、六十華嚴(大、九、六一九、中)、如來興顯經(大、一〇、六〇一、下)參照。

(i)菩提品、廣說中、第四、無漏法界品、業甚深を說く、成熟衆生業、漢第二五偈

譬如密雲布、灑雨成百穀、淨界亦如是、流善熟衆生

の偈は(圭)八十華嚴(大、一〇、二六九、上)に據りたるもの、

(j)同じく、化所作業、漢の第二八偈(梵、藏本の第二九、三〇偈)

譬如日光合、同事照世間、淨界亦如是、佛合同業化

は、八十華嚴の如來身第三相(大、一〇、二六六、上)、それに相當する六十華嚴(大、九、六一六、上)、如來興顯經(大、一

〇、五九八、下）の文に基くものなるべし。

（k）同じく無分別業、梵藏本の第三二偈（漢、第二九偈）は、八十華嚴（大、一〇、二六六、中）の、

復次佛子、譬如日出於閻浮提、先照一切須彌山等諸大山王、次照里山次照高原、然普照一切大地、日不作念、我先照此、後照於彼、但以山地有高下故、照有先后、如來應正等覺、亦復如是……

の要約なるべく、六十華嚴（大、九、六一六、中）、如來興顯經（大、一〇、五九九、上）等をも參照。

（l）菩提品、廣說、第六諸佛成熟衆生の中、無厭成熟の因を顯はす、漢、第五〇偈、

巨海納衆流、無厭復無溢、佛界攝衆善、不滿亦不增

の偈は、八十華嚴、如來心第五相を說く文（大、一〇、二七一、下）及び其と相應する六十華嚴（大、九、六二二、下）、如來興顯經（大、一〇、六〇五、下）に基くものと指定するを得べきである。

〔C〕如來祕密經

安慧は菩提品廣說中、第九諸佛智慧品のうち、平等性智の用を說く第七一偈（漢、第六六偈）の後半の所依として、De-bshin-gregs-pa gsa'i-pa bstan-paḷi mdo. の經名を佛地經と共にあぐるが、和譯して、如來祕密法門經といはるゝが此の類似の經名を大藏經中に求むれば、法護譯、佛說如來不思議祕密大乘經、二十卷（大、一一、七〇四、中）が得られ、大寶積經、卷第十、密迹金剛力士會第三三に相當し、廿珠爾勘同目錄（一三一頁）によつて、その藏名の一致するを認め得る。莊嚴經論、弘法品、中、佛祕密經としてあぐるものと同一經典なるを知る。今、安慧の引用せる經文を譯出すれば、

（圭）ある衆生には如來の色は青く、或るものには黃に見ゆる等と說くなり。

とあるは、如來不思議祕密大乘經(大、一一、七一六、下)の

或有天人、樂欲觀佛金色相者、卽令彼等見金色身……青、黃、赤、白等諸色……

とある文に相當するものであつて、その偈の所依となつてゐるものであることを知る。

〔D〕聖智慧光明莊嚴經(Hphags-pa ye-ḉes snaṅ-baḷi rgyan-gyi mdo)

(a)本經は菩提品、略說、の中、第二、無二相品、第四偈(漢、第三偈)の第一句、「一切の諸法(の眞如)は佛性」といふものゝ所依として、本經の經句が引用せられてゐる。その經句を譯出すれば、

無生法は常住〔にして〕如來なり、

一切法は又善逝の如しと。

右の句は、佛說大乘入諸佛境界智光明莊嚴經、法護譯(大、一二、二五七、上)のものと正しく一致し、僧伽婆羅等譯、度一切諸佛境界智嚴經(大、一二、二五一、上)、曇摩流支譯、如來莊嚴智慧光明入一切佛境界經(大、一二、二四二、中)の相應文をも見るべきである。

(b)菩提品、廣說の中、第六、諸佛成熟衆生品の第四、自然成熟の因を顯はす第五二偈(漢、第四七)、自然成熟の譬を顯はす第五三偈(漢、第四八偈)の兩偈は佛說大乘入諸佛境界智光明莊嚴經、卷第二(大、一二、二五七、上—中)の「如日光明行閻浮提」の喩說と一致するものと見られ得る。

〔E〕能斷金剛經

又、第四偈、第一句の所依として能斷金剛經(大、八、七七五)の文、

若以色見我　以音聲求我　是人起邪觀　不能常見我
應觀佛法性　卽導師法身　法性非所識　故彼不能了

と正しく一致する二頌(十七)を引用してゐる。

〔F〕十　地　經

菩提品、廣說の中、第五、諸佛自在品、佛の增上威力を顯はす漢、第三四偈(梵、藏本、第三八、三九偈)の如來の自在に抗し得ざるを說くものゝ所依として、十地經(十八)の文を引いてゐるがそれは十地經、卷第九(大、一〇、五七一、中)の次の文と一致する。

如來所行境界證入其復如何、金剛菩薩言、佛子、譬如有人、於四州界、取一砂礫或二或三、大如棗核、而作是言爲於無邊諸世界中地界大多、爲此多耶、我觀汝問亦如是、如來應供正遍等覺、無量智者無比法性、云何汝今以與諸菩薩法性比量

本、菩提品中に於てはこの一度が所依として引用するのであるが、莊嚴經論中には度々引用せられその頌の所依となつてゐる。

〔G〕維　摩　經

菩提品、廣說の中、第六諸佛成熟衆生の第六、展轉成熟の因を顯はす漢の第四九偈(梵、藏本第五四偈)

一燈然衆燈　極聚明無盡　一熟化多熟　無盡化亦然

の基くものを安慧は指示(十九)して維摩經とする。今、それに相當するを羅什譯、維摩詰所說經、菩薩品第四(大、一四、五

四三、中)によりて出さば、

維摩詰言、諸姉有法門名無盡燈汝等當學、無盡燈者、譬如一燈燃百千燈、冥者皆明、明終不盡、如是諸姉、夫一菩薩開導百千衆生令發阿耨多羅三藐三菩提心、於其道意亦不滅盡、隨所說法而自增益一切善法、是名無盡燈也。

〔H〕 陀羅尼自在王〔經〕

菩提品、廣說の中、第五、諸佛自在品の轉のうち、第三六偈(梵、藏本、第四一偈)五根轉、

如是五根轉　變化得增上　諸義遍所作　功德千二百

について、安慧は陀羅尼自在王と法華經とを以てその基くものとしてゐる。(二)法華經は次に述べるとして、陀羅尼自在王〔經〕とは、Hphags-pa gzuns-kyi dbaṅ-phyug chen-poḥi rgyal, Gzugs-kyi dbaṅ-phyug-go rgyal-po とも記して、聖陀羅尼大自在王、陀羅尼自在王とも譯され、經の語も、品の語もないのが奇異に感ぜらるゝのであるが、これを大藏經中に求むれば、大集經陀羅尼自在菩薩品(大、一三、五—六)であつて、異譯に竺法護譯、大哀經、八卷がある。いま、本頌の所依とて直接、經文を引くことは出來ないがその意は認め得らるゝものである。

而して、安慧が菩提品、廣說中、第七諸佛淸淨法界品を說くに當り、(三)衆生成熟品の次に淸淨法界品を說くに如何なる關係あるかを論述する中、菩提品(一切種智品)略說は菩提の共相を說いて佛とならば成熟するなりといふ義を說き、專ら陀羅尼自在王〔品〕と法華經により、今はこの淸淨法界の菩提の六義を佛地經によつて說くといつてゐるから、一切種智品、の略說も亦、本、陀羅尼自在の經說に基いて作頌せられたものであることを知り得るのである。

〔I〕法華經

(a)法華經について、安慧の指示する所は、前經、陀羅尼自在王、と共にであつて、五根轉の功德について、妙法蓮華經、法師功德品第十九(大、九、四七、下)に法華經受持の德として、八百眼功德、千二百耳功德、八百鼻功德、千二百舌功德、八百身功德、千二百意功德が說かれてゐるが、今は、それが佛の五根轉の功德として應用されてゐることに注意すべきである。

(b)又、經中菩薩行を說く諸經文は陀羅尼自在王〔經〕と共に菩提品中、略說一切種智品の基くものと認めるべきであらう。一切種智品の第三偈(漢、缺)の重釋の難行の相は序品(大、九、三、上)に、

復見菩薩、身肉手足、及妻子施、求無上道、

とあり、無量の善を積聚する相は同じく序品(五、中)に、

亦行衆善行、得見無數佛、供養於諸佛、隨順行大道、具六波羅蜜

等といふ經文によりて知らるゝ。

(c)次に、法華經に基くものと思はるゝは、第六、諸佛成熟衆生の第三普遍成熟因、漢、第四六偈(梵、藏、第五一偈)であつて、如來壽量品第十六(大、九、四三、中)の頌と對比するであらう。

轉法及法沒　常說法敎化、無數億衆生
得道亦涅槃　令入於佛道、爾來無量劫
處々方便起　爲度衆生故、方便現涅槃

不動眞法界。　　而實不滅度、常住此說法。

(d)又、廣說、第一無上歸依の漢第五、第六の兩偈は法華經、譬喩品、第三の有名なる頌

三界無安　猶如火宅　衆苦充滿　甚可怖畏
常有生老　病死憂患　如是等火　熾然不息
……

今此三界　皆是我有　其中衆生　悉是吾子
而今此處　多諸患難　唯我一人　能爲救護。

といふ經說、並にその長行の意をこゝに阿毘達磨的分別によつて整理したるものに過ぎないであらうと信ずる。

〔J〕其の他の諸經

菩提品廣說、第八諸佛三身品の受用身を顯はす第六一偈(漢、第五六偈)(藏譯)

受用(身)は一切世界に於て、　　衆を攝すと、刹土と、名號と、
身と、法受用と、　　所作等によつて差別せり。

に於て、安慧はその法受用を釋して、(三)ある受用(身)は十地の大乘を說き、或る受用(身)は楞伽經を、ある受用(身)は波羅蜜を說くが故なり、といつて、楞伽經を十地經、並に般若經と並べあげてゐることに注意しやう。

又、第四無漏法界品の第五、法界如來藏を顯はす第三七偈(漢、第三三偈)は勝鬘經の如來藏章第七、自性淸淨章第十三等に依りたるものであらう。勝鬘經は述求品之二(暑四、二七、右)の長行中に見られ、業伴品第十六(暑四、三七、

右）の第一偈は正しく、勝鬘經、攝受章第四（大、一二、二一八、中）の「又如大地持四重擔云々」の經文に基くを知ることから類推して大過はないであらう。

五、傳燈教學を背景とするもの

以上によつて知らるゝ如く、菩提品、八十六偈のうち、多數のものが、借りられたもの、頌形に整へたもの、要約したもの等であるが、然し、それ等の中に、論頌作者、時代思潮を批判して獨自の思想を頌作した如く思はるゝものもある。例へば第十、顯諸佛不一不多品、第七七偈（漢、第七一偈）の如きがそれである。今、藏譯を示さば、

種性は別と、義有るとの故と、　圓滿と、無始との故に、
佛は一では無く、無垢の所依（は）、　別異無きが故に多でも無きなり。

であつて、此の頌の解釋は長行にあるから省くが、この諸佛の不一不多のいはるゝその思想背景について安慧はかく、それを述べてゐる。即ち、

㊂或るものは、一世界に一佛が現等覺し、十方の他の世界には他佛は出現せずと言ふ。或るものは、輪廻無始の時より一佛のみあり、彼の（佛）が一切の佛國に於て衆生利益を作しつゝ作業を作すなりといふ。
或るものは、多佛あり、法身に住する時、又、我と我所との分別を捨てゝ所知と煩惱との障を離れる法身は多ありといふ。

そこで、一佛でもなく、多佛でもないことを敎ゆるが故に偈が初めらるゝといふ義なり。

とあり、此等の思想の傳持の系統を佛身思想の上から追究することは興味ある問題であるが、今はそこまでに立ち入つてゐない。たゞ、こゝでは此の思想は經典のうちのものでないであらうことを注意するに留める。

又、第五、諸佛自在品のうち、轉を明す、について安慧は此等無量の轉はそれの經の中に出づるが如しと見るべきなりといつてゐるが、第四一偈の五根轉、第四二偈の意根轉、第四四偈の分別轉、第四五偈の安立轉等を區別してゐることより、諸八識を轉じて四智を得る思想のありしことを充分認め得ることゝ思ふ。無量の轉をこゝに整理したる所に獨自の論頌としての意義があるものであると信ずる。況んや、漢譯長行の釋に煮根轉に於て意根を染汚識と釋するし、安慧又、これに決定的の釋をしてゐるに於てをや。

然も、經典のうちから、恐らく見出されぬであらう諸偈もその論頌作者の教學傳承のうちに見出さるゝでもあらうか。

六、結　語

以上の論述によつて次のことが知り得らるゝ。

(一)李百藥の勅によつて製せし大乘莊嚴經論の序に、「大乘莊嚴經論者無著菩薩纂焉」とあるが纂とは、集むる意といふことであるが、その意味は無著菩薩が諸大乘經の要文をとつて、集めたものといふ意となる。それは、恰も、世友菩薩に所集論があるが如く、無著は又、龍樹以前以來興起せる諸大乘經の要文をあつめて、大乘阿毘達磨をつくりしものである。その集め方は瑜伽論に隨ひ、五義を以て鉤鎖せしめたものであると知るべきである。

從つて、この序の意は單なる傳說ではなく、學的意義を持つものであつて、諸他の傳說と同一に取り扱ふべきものでない。

(二)佛三身思想は無著菩薩から始まると考へられてゐるが、その基は佛地經であることが知られるから、本經を傳へし敎派の留意すると共に、十地經との關係をさぐりつゝ、如來地の研究が進められねばならない。

(三)佛地經の菩提を理想として修習するのであるから、無著菩薩の佛道は徹底せる菩薩敎である。

(四)本論の基く諸經は龍樹の智度論に出づるを外として、大體第二期の大乘經典と確定してよく其等の經と爾後の成立宗派の思想と連絡して見らるべきものと考へる。

註㈠ Jñānaśrī, Sūtrālaṅkāra-piṇḍārtha. Mdo-lḥgrel, XLVIII. p. 13 a—14 a. 西藏大藏經總目錄 No. 4031.

㈡ XLVIII. p. 15 b.

㈢ Mahāyāna-sūtrālaṅkāra-bhāṣya Mdo-lḥgrel. XLIV. p. 150. a.—152. a

㈣ Buddhabhūmi-sūtra. 甘珠爾勘同目錄 No. 941. LXXXV. p. 46. b—47. a 西藏大藏經總目錄 No. 275.

㈤ 佛地經論、卷第五、(大、二六、三一三、中)

㈥ 同　卷第五、(大、二六、三一三、下)

㈦ Sūtrālaṅkāravṛittibhāṣya. Mdo-lḥgrel. XLVI. p. 157. a. 5—8.

衆生平等の智とは、第一地の時に、我あり他衆生あり、他あり、又、自ありといふ衆生と我との二について平等、而して第一地の時に覺るなりといふ義なり。

淨修の故に考へられたりとは、第一地に平等を證る智を、第二地より十地までに修習し、而して第十地までに我所分別の微細なる習氣を捨てゝ清淨となる。而して佛地に平等智となると考へられたりといふ義なり。

㈥ 佛地經論、卷第五、(大、二六、三一五、下)、佛地經、(大、一六、七二二、上)

㈦ XLVI. p. 156. b. 7—8.

㈧ XLVI. p. 157. b. 5—8.

㈨ XLVI. p. 158. a. 7—8.

㈩ XLVI. p. 159. b. 3—4.

(十一) 復次佛子、譬如阿那婆達多龍王、興大密雲布、遍閻浮提、普霑甘雨、百穀苗稼、皆得生長、……饒益衆生、佛子、如來應正等覺、亦得如是、……是爲如來音聲第七相

六十華嚴、(大、九、六一九、下)、如來興顯經(大、一〇、六〇二、下)

(十二) 復次佛子、譬如大海、有四巖然光明大寶、布在其底、性極猛熱、常能飲縮百川所注無量大水、是故大海、無有增減、……

……佛子、如來應正等覺、大智慧、亦復如是。

(十三) XLVI. p. 157. b 8—158. a

(十四) XLVI. p. 122. b. 2.

(十五) XLVI. p. 122. b. 1.

(十六) XLVI. p. 140. a. 5.

(十七) XLVI. p. 148. b. 7—149. a. 2.

(十八) XLVI. p. 141. b. 3.

(十九) XLVI. p. 148. b. 2.

(二十) XLVI. p. 153. a. 4.

(二十一) XLVI. p. 160. a. 3—6.

(二十二) XLVI. p. 144 b. 7.

(注)　宇井白壽著、「攝大乘論研究」、頁八八

同　「唯心の實踐」、大乘莊嚴經論の著者